

八街市教育振興基本計画改定（案）に対する意見と市の考え方

対応項目

- A：意見を受けて加筆・修正したもの
- B：案に意見の考え方が概ね含まれていたもの
- C：案に意見の考え方が一部含まれていたもの
- D：案に意見の考え方を反映・修正しなかったもの
- E：その他の意見

番号	分類	意見の要旨	対応	市の考え方
1	「はじめに」の文章	「はじめに」のページ 「不登校対策」を削除してください。 【理由】 昨年3月の「行政と市民の話し合い」のなかで、私の質問に、教育長は、「不登校は問題行動ではない。」と回答くださいましたので。	B	教育委員会では、不登校は問題行動ではないという認識には変わりはありません。 「はじめに」のページの「不登校対策」の文言を「不登校児童生徒支援」に訂正します。 今後も、誰一人として取り残すことのない環境の構築のために力を尽くしていきます。
2	第4章 基本施策と事業 八街市教育創生 『MOT E』	20ページ Make Our <u>Tommorw</u> 's Education. ↓ Make Our <u>Tomorrow</u> 's Education. 訂正してください。	A	ご指摘のとおり、訂正します。
3	第4章 基本施策と事業 2 教育相談体制の充実と長期欠席児童生徒の適切な支援	主に26ページ 長期欠席児童生徒が問題ではなく、学校のあり方が問題だと思います。 【理由】 10ページに「学力が向上すれば学習が楽しくなり、登校意欲の向上に繋がると考えています」と書いてありますが、子どもが学校に「行かない」理由は、これ以上は無理だという必死の訴えなので、学びたいと思えるのは生きることが保障されてのことです。学校が安心して教育を受ける場になって、「学びたい」と思えるのです。 26ページでは、学校に行かない子が特別な心理的、環境的問題を抱えているように定義し、行か	C	教育委員会では、児童生徒が長期欠席になる理由を適切に捉えるために、本人の実態把握や本人を取り巻く環境の把握をとおり、学校の支援がその子にとって最適なものかを、関係機関と連携を図りながら、様々な視点から検討を重ねて対応しています。 これからも、子どもの立場に立った対応を推進していきます。

	<p>ないのを子どもの自己責任にし、かつ学校の学びになじむ子とそうでない子に分けています。</p> <p>学校へ行かない子、障害のある子、貧困家庭の子、外国人の子などは、地域の学校の中でこそ楽にならなければ公教育の責任を果たしているとは思えません。なぜ子どもたちは学校に行かなくなってしまうのか、学力格差はなぜ生じるのか、しかもそれが家庭の経済状態によって左右されるという不公平がなぜ生じるのか、外国人の子どもの生活実態はどのようなものかという問いを立てずに、「個別の状況に応じた」支援ができるのでしょうか。</p> <p>(1) (2) は「子どもたちのために」という善意からであっても、「どんなに善意であっても、善意であるからこそ、こんなにやってくれているのにそれに答えられない自分をダメだと考えてしまう。」という経験者の話もあります。しかも(1) (2)の対策を重ねても学校に行かない子は増え続けています。子どもの問題ではなく学校のあり方の問題だからです。</p> <p>また、長欠の子どもの中から「不登校児」を見分けて、状況を継続的に把握する職責を負うのはクラス担任をはじめとする教職員です。教員の多忙は極まります。</p> <p>(教育支援センターの) カウンセラーは教育のプロではありません。カウンセラーに担ってほしいのは、子どもや教員からの相談あるいは教育研修ではなく、教員集団が、なぜ子どもが学校に来ないのかとか、学校現場が息苦しく教員が追い詰められている現状を話合う中に、カウンセラーも入</p>		
--	---	--	--

		り、教員たちと想いを共にして、教員の関係修復や関係改善などについて力になることです。		
4	<p>第4章 基本施策と 事業</p> <p>2 教育的 ニーズの把 握と指導・支 援の充実</p>	<p>主に27ページ 分ける教育ではなく、インクルー ジョンを基盤とする教育を考え てください。</p> <p>【理由】 「はじめに」のページにもあるよ うに、社会のグローバル化、価値 観の多様化などで、これからは多 様な背景を持った人がいっしょ に暮らすこととなります。 市長の理念である「ダイバーシテ ィ（多様性）のあるまちづくり」 を目指すなら、分ける教育を変え ていくことが求められると思い ます。国際的にもインクルージョ ンを教育の基盤とする方向に向 かっています。</p> <p>20ページ Make Our Tomor- row's Education. で大事なこと は、「みんな違ってみんないい。」 を子どもたちが教室で体現する 教育ではないでしょうか。 ところが、27ページにあるよう に、子どもたちは個別の状況に応 じて分類されています。「多様性」 はなくなり、教室に残った子ども は均質になります。分けられた子 どもも、その分けられた中では均 質になります。</p> <p>学校は障害のある子どもとな い子どもとを分けてきました。最 近では発達障害のある子どもも 特別支援教育を受けるようにな りました。そうすれば、残った子 どもが学力やスキルを伸ばすに は効率的ですが、教室でいろいろ な子どもどうしが交わることで、 それぞれが様々な悩みや問題を 抱えていることを知ります。この 現実を受け止め、誰もが生きやす い社会にしていく、これが本来の</p>	C	<p>教育委員会では、特別支援教育 とは、特別支援学級だけでなく、 学校全体で行うことと考えてい ます。</p> <p>また、体制整備とは、障害のあ るなし関係なくすべての児童生 徒を対象に、支援の基礎的な環境 整備を向上させることを基本に 置いています。</p> <p>特別支援学級は、その基礎的環 境整備以上に個別にきめ細やか な支援が必要な児童生徒のため にあり、その基本は個別の支援で すが、国の方針にも則り、個別の 支援と同時に交流や協働の機会 も多く設定し、共生社会の実現に 向けて学校教育を推進していき ます。</p>

	<p>多様性だと思います。</p> <p>学校で分けられて、社会に出てから「多様性」とか「共生」とか言われても、自然な助け合いができるはずがなく、障害者は迷惑だと感じる場合すらあります。</p> <p>「ひとが輝くヒューマンフィールドやちまた」とは、（個別の支援と称して）子どもを分けて、分断するまちではなく、市長が言及された、金子みすずさんの詩、「みんな違ってみんないい。」の風景が目の前に広がるまちだと思います。</p> <p>市議会だより219号に「多動性障害がある児童に先生がどなるのを聞いた他の児童が、登校をしる。」と出ていました。また「その子がいると担任がたいへん」という声があることは聞いていますが、「その子がいるので」という捉え方が既に「そう思わされている。」のです。</p> <p>教員一人が孤立してがんばれば無理です。複数で教員も助け合いながら対応する体制があれば、「その子がいるから」という認識にはならないと思います。その子の問題ではなく、体制、システムの問題です。</p> <p>以上により、これからは特別支援教育で子どもを分けないで、インクルージョンを基盤とする教育を進めることを考えてください。</p>		
--	---	--	--